

## 記憶の中の台湾と日本（2） ——統治下において高等教育を受けた人びと——

大 谷 渡

### I

台中県豊原市に至誠診所を開業してきた廖里医師は、84歳で長い診療生活から引退することにした。夫を戦地にとられ、女手一つで息子を育てた。その息子も六十をいくつか過ぎ、大会社の経営から最近退いた。

廖里が彰化高等女学校を卒業し、東京女子医学専門学校に入ったのは、1936年（昭和11）4月であった<sup>1)</sup>。祖父は東京行きに大反対だった。「風呂敷に本を包んで上京しても、帰りにはその風呂敷に赤子が包まれている」とまで言われて、悲しい思いをした。

もともと祖父は、女は嫁に行くから投資の必要がないという考えだった。お金がかかることを喜ばなかった祖父と喧嘩して、父と母は娘を東京に行かせた。

廖里は1918年（大正7）4月27日に、台中州豊原郡神岡庄大社85番地に生まれた。台湾地方官官制が改正され5州47郡が置かれたのは1920年7月だったから、彼女が生まれたころは台中州はまだ台中庁と呼ばれていた。

父は廖德鏞、母は陳鄙といった。雑貨商の父は肉なども売って、若いときから苦勞した。德鏞は、娘に同じ苦勞をさせたくなかった。筆を執るような仕事に就かせたかった。

廖里が岸裡公学校に入ったのは、1925年（大正14）である。当時、公学校に子供を通わせる家は少なかった。学校の先生は、家家を回って入学を勧めた。

その頃、小さい子供たちは、用足しに便利なように、お尻のところを開けたズボンを履いていた。6、7歳ぐらいになると、普通のズボンを履けるようになる。里も6歳ぐらいになると、パンツとズボンを履いた。「パンツ履けるか

ら学校へ行けるよ。」「入学しなさい。入学しなさい。」と、先生が頼みに来た。

里が入学したクラスは、10人ぐらいしかいなかった。女1列、男2列、机を並べて「あいうえお」から日本語を勉強した。公学校の先生は普段から官服を着ていて、特別に式のある時には、肩にモールの付いた儀礼服を着用し帯剣した。式の時には、「朕惟フニ皇祖皇宗国ヲ肇ムルコト宏遠ニ…」と、教育勅語を唱和した。将軍のような儀礼服は印象的であったし、公学校時代に諳んじた教育勅語は、今も口をついて流れ出す。

公学校では日本人の先生は少なかった。日本人で担任だったのは竹村先生、きびしくはなかった。当時公学校の教師になれた台湾人の先生は、やはり偉かったと思っている。

みんな裸足で学校に通った。里も裸足だった。風呂敷に2、3冊の読本を包んで、肩から斜めにかけて通った。靴を履くのは正月だけ。正月には、子供たちは靴を履いて遊んだ。土の上に線を引いて片足で跳んでゆく遊び、竜眼の種を集めて穴に何個入るかを競う遊び、そしてかくれんぼ、楽しかった子供時代がよみがえる。

普段は大人も、裸足か下駄だった。畑仕事はもちろん裸足。雑貨商の父親も裸足か下駄で働き、夜寝る前に下駄を洗った。靴を履くのは他所に出かける時だけだった。里がいつも靴を履くようになったのは、女学校に入学してからである。

公学校6年を終えたあと、1年間の補習科に入って、算盤や縫物など家庭的なことを習っていた。正月ごろになって、父親から「女学校に行くつもりないか。」「受験してごらん。」と言われ、準備の日数はなかったが、彰化高女を受験し合格した。1932年（昭和7）春だった。

家から縦貫鉄道の豊原駅まで1時間、豊原から彰化まで1時間かかる。家から駅まで1時間かかるから、学校では通学を許可しない。里は学寮に入った。寮費は1か月11円だった<sup>2)</sup>。

家は貧しかったが、父の廖徳鏞は商人だったので、注文した品物の代金をすぐには払わなくてもよかったし、里をととても可愛がっていた叔父の廖徳泉が彼

女をいっしょに教育したいと、ことごとにお金を援助した。廖徳泉は日本人といっしょに、石炭関係の仕事をしていた。

周りの子供たちは、学校へ行かなかった。畑へ行ったりして、仕事をしなければならなかった。まして上級学校に進学するものはまれであった。神岡庄大社から女学校へ進学したのは、里の知る範囲では3人を数えるにすぎない。

台中には、主に日本人が入る台中高女があった。彰化高女は半分が台湾人、半分は日本人だった。1学年2クラスで、4年制だから合計8クラス。1クラス50人で、補習科を合わせて全校生徒450人であった。先生はすべて日本人であった。里はひたすら学業に励む日々を送った。

1936年の春、彼女は彰化高女の同級生洪氏採媚といっしょに東京に行くことになった。洪氏採媚は、台中草屯の名望家の娘で、兄は東京帝大の学生だった。採媚だけを頼りに、廖里は故郷を発った。

東京中野町の集合住宅に、里と採媚は一時部屋を借りた。そこでは、幾人もの台湾人が部屋を借りて住んでいた。採媚は、まもなく兄のところへ引っ越ししてしまった。所持金をどう保管すればよいのか、どこに置けばよいかもわからない。頼る親戚もない。17歳の里は、ただただ不安であり、こわいだけだった。

集合住宅に、東京医専の台湾人学生李朝湖がいて、とても親切にしてくれた。

東京に来た時、廖里はすでに帝国女子医専に入学が決まっていた、お金も払い込んでいた。だが、何かと面倒をみてくれた李朝湖は、彼女に東京女子医専の受験を勧めた。李朝湖に連れられて、東京女子医専の入学試験を受けた。出来が思わしくなかったのも、発表を見るのがこわくて見に行かなかった。人のよい李朝湖は発表を見に行き、「合格したよ。」と教えてくれた。

東京女子医専に入るためには、もう一度学費を払わなければならなかったが、父と叔父はそのお金を工面した。同級生の洪採媚は、帝国女子医専の薬専に推薦入学が決まっていた、そちらに入った。

東京女子医専の在校生の名簿の中に、彰化高女で2級上だった呉氏敏の名を見つけた廖里は、敏に電話をかけて中野まで迎えに来てもらい寄宿舎に入った。呉敏は彰化の歯科医の娘だった。里は学校の宿舎に入ってようやく安心するこ

とができたが、世話になった李朝湖に、ろくに挨拶もしなかったことが心残りだった。

そのうち、同級生が寄宿舍に入ってきた。中国や朝鮮から、幾人も学生が来ていた。寄宿舍には舎監がいて、門限があった。在学中、ほとんどどこへも行かなかった。教育は厳格だったけれど、なにも不自由なことはなかった。

一步一步戦争の時代になった。女子医専にはあまり影響がなかったように思うが、出征した先生方のことが記憶のかなたに浮かぶ。

1941年（昭和16）4月17日に、廖里は東京女子医学専門学校を卒業した。卒業後2年間、東京の病院に勤めた。初め荒川に近い賛育会病院小児科に勤め、次いで浅草に近い救世軍病院の産婦人科に欠員があって勤めた。仕事に就いてからは、デパートへ行ったり、映画を楽しむ余裕ができた。

1943年（昭和18）6月、叔父の廖徳泉の娘が東京に来ていたので二人で台湾に帰った。帰る時、「安全な東京から、どうして危ない南の第一線の台湾に行くのですか」と、東京にとどまるように促された。だけど里は、「私の故郷ですから」と言って帰ることにした。

東京から広島へ、広島から福岡へ、列車で12時間ぐらいかかった。荷物は船で送った。つてがあって、福岡から台湾に向かう、6人乗りの陸軍の飛行機に乗せてもらって帰った。特別のつながりがあって、軍人4人の飛行機に二人が同乗させてもらった。

豊原に帰ると、中野の共同宿舎で、東京女子医専に入るにあたって世話になった、あの東京医専の学生と同じ名の朝湖医院が開業されていることを知って里は驚いた。ろくに挨拶もせずに別れて以来、7、8年が過ぎていた。

「挨拶に行かなければ」と里は思った。「お子さん幾人ですかと聞いたら、まだ奥さんもらっていないって。私、もうびっくりしたのよ。私開業する時に、また世話してくれたんですよ。」と、廖里医師は李朝湖との再会の喜びを語った。

李朝湖は豊原の人、廖里とは九つ違いだった。李朝湖は台中一中を出て、京都医科大学に進んだが、思想問題で退学し、試験を受けなおして東京医専に入った。祖父は漢方医だった。

## 記憶の中の台湾と日本（2）（大谷）

里は、神岡庄大社の隣、社皮というところで至誠医院を開業した。豊原市街では開業できなくて、無医村の社皮で開業したのである。ここで10年間開業したのち、豊原に移った。その頃には、医院ではなく診所の名称となっていた。

1944年（昭和19）9月、廖里は李朝湖と結婚した。結婚式後幾日もなく、軍の医者として召集された。「あの時は物資も何もないので、式は簡単にした。それから5、6日後に夫は出征した。」「出征する人と結婚するのは、いざこざもあって、評判はよくなかった。」と廖里医師は語った。

南方への出征は、高雄からだった。高雄の近く左営に軍港があった。里は夫を左営まで見送った。港の中には入れなかった。若い里は、夫が戦死するなどと考えもしなかった。1年後には必ず帰って来ると、希望をもって見送った。

明けて1月、役所から戦死の通知があった。その前日に、サイゴンからの夫の葉書を受け取っていた里は、夫が死んだとはどうしても信じることができなかった。

いっしょに出征した医者が、のちに里を訪ねて最期の様子を語ってくれた。サイゴンの港に停泊していた船が、アメリカ軍の飛行機に攻撃されて沈められた。甲板にいた人たちは、海に飛び込んで助かったが、李朝湖は船室内にいたために助からなかったという。

戦死の公報を受け取った時、里のお腹に彼の子が育っていた。1945年（昭和20）8月2日に男の子が生まれた。「あの子パパ知らないの。再びとあのようなことが起きないように」と、廖里医師は念じている。

社皮と豊原の間に、陸軍の基地があった。米軍機動部隊の艦上機による機銃掃射がしばしばあった。砂利を落とすような音があちこちに響いた。住民が追われ、傷ついた。里の医院にも、たくさん負傷者が担ぎこまれた。当時は医療機材も不足していたが、「早く処置してくれ」と懇願するだけが人の治療にあたった。満27歳の時のことである。

日本が戦争したことは間違っている。ただ、敗戦のあと、日本人の姿に感心したことがあった。校長でも教師でもみんな頭を下げて、道端で自分の物を売った。威張っていた先日までの姿を捨てて、謙虚に頭を下げて、すべての持ち

物を売り払って日本に帰った。一般の台湾人と比べると、いいものを使っていた。筆筒とか皿とか、そういう生活用品を里も買った。

「日本人は正直で、礼儀作法が正しかった。」「私たちを教育しているときはね、日本は良かった。」「日本の教育がなつかしい。」と述べたあと、「夫の死を悲しむ暇もなく仕事に追われ、忙しさにまぎれて過ごして来たけれど、今になって初めて、ああ寂しいなとつくづく感じるの。」と、廖里医師は言い添えた<sup>3)</sup>。

廖里医師に会った翌日、台中市内の黄王一媛医師宅を訪ねた。黄王一媛は、廖里と同じ彰化高女と東京女子医専の出身である。

王一媛は1916年(大正5)5月25日に、台中州彰化街南門241番地に生まれた。父は王倫魁、母は潘玉蘭。王倫魁は台北医学校第1回の卒業。台北で病院勤務をしたあと、南門で倫魁医院を開業していた。

一媛は長女。成人した兄弟姉妹は8人、3人が1歳から3歳までに夭折した。すぐ下の弟三聘は慶應義塾大学卒業で現在シヤトルに住んでいる。妹四妥は東京女子医専卒業、妹五良は日本女子薬専卒業、その下の二人の弟と妹は、それぞれ台湾大学の物理系、医学系、植物系を卒業した。

王一媛が公学校に入ったのは、1923年(大正12)7歳の時であった。公学校は、男子と女子に分かれていた。4年生までは東門の孔子廟で勉強した。この孔子廟では、父倫魁も母玉蘭も幼い時に学んでいる。一媛たちは、5年生から新築された北門の彰化女子公学校校舎に移った。

孔子廟の公学校では、絵本を見たり歌を歌ったりして日本語を覚えた。台湾人の先生に教わった。北門の彰化女子公学校は、ほとんどが日本人の男の先生であり、やさしかった。1929年(昭和4)に公学校を卒業し、彰化高等女学校に進学した。彰化高女は1クラス50人で1学年2クラス編成。台湾人のクラスと、足りない分を日本人を入れたクラスがあった。公学校でも女学校でも、一媛はわりあい平和に過ごした。

高女時代の初め頃、霧社事件があった。社会の出来事にそれほど関心をもっていたわけではないが、「あんなむごいことしなくても、平和に暮らしたらいいのにと思っていた」という<sup>4)</sup>。

1933年（昭和8）に彰化高女を卒業し、東京女子医専に進んだ。父が基隆まで送ってくれた。2, 3人の台湾人の友達といっしょだった。神戸から列車に乗り、東海道線で東京に向かった。東京駅には親戚の人が迎えに来てくれて、下宿に落ち着いた。ここで受験し、合格後女子医専の寄宿舍に入った。いろんなところから学生が来ていた。日本の田舎から来た人、朝鮮・中国・満州からの学生もいた。アメリカからは、ハワイの日系人が入学していた。初めは、知らない人ばかりで寂しかった。

予科と、本科1年生から4年生までの学生が部屋を共にした。上級生にも、台湾から来た人がいたし、同級生には陳却がいた。陳却は今も健在だけれど、上級生のほとんどは亡くなった<sup>5)</sup>。

女子医専の教育はきびしかった。毎日の課程がぎっしりと詰まっていて、ほとんど時間がなく、1度夏休みに台湾に帰っただけである。吉岡弥生先生の、学業に対する姿勢はきびしかった。

女子医専の2年生の時、二・二六事件があった。ちょうど試験前だった。号外が出て、大臣が数人殺されたと知ってびっくりした。

1938年（昭和13）に東京女子医専を卒業して、同年4月に母校の医局に入った。2年半、俸給なしで勤め、台湾に帰った。しばらく父の医院を手伝ったのち、彰化キリスト教病院に勤めた。院長は英国人医師ランドバーだった。米英との開戦後ランドバーは英国に帰ったが、戦後息子とともに病院に戻った。

1942年（昭和17）11月、一媛は医師の黄啓棼と結婚した。黄啓棼は六つ年上で、台北医学校の卒業であった。嘉義の朴子街で人寿医院を開業し、夫は内科、妻は産婦人科を受け持った。産科医の一媛は、夜中も仕事をしなければならなかった。戦争中で物資は少なかった。

戦争が激しくなったので、夫の老父母をつれて幼子二人を抱え牛車に乗って、嘉義の田舎、山の方の牛稠溪という農村に疎開した。牛稠溪には、台北から疎開した人たちがいた。共同で使っていた井戸にばい菌が入って、下痢が流行ったことがあった。わずかではあったが、トリアノンという当時最新の消炎剤を持参していたので、その薬をみんなに分けて治療し、疎開者に生物・生水を口

にしないよう衛生問題を聞かせた。牛稠溪から少し離れたところに化学工場があって、そこに米軍機の爆撃があった。

夫の黄啓芬は、空襲中に出動義務が課せられていたので疎開できなかつた。空襲があると、指定された寺など、1箇所集まって、負傷者の治療にあたらなければならなかつた。空襲はひどかつた。疎開から帰ると、家の中が爆風でぐちゃぐちゃになっていた。

黄啓芬は終戦2か月前の1945年6月に、軍の医者として召集された。台湾島内で訓練を受けたが、無事復員した。朴子街から召集された鄭慶朝医師は、南方の海で戦死した。

東京にいた一媛の妹四妥と五良は、空襲で焼け出されてリュックサック一つさげ、着の身着のまま台湾に帰ってきたという<sup>6)</sup>。

## II

李棟梁は1941年（昭和16）3月に台中第一中学校を卒業して、同年4月に中央大学専門部法科に入学した。父は漢方医の李徳六、母は陳水治。1922年（大正11）2月28日に台中州南投郡中寮庄163番地、現在の南投県中寮門に生まれた。一人息子で、姉が5人、妹が6人いた。家庭は裕福だった。

7歳の時に中寮庄の隣の龍眼林公学校に入り、卒業後1年浪人して1936年（昭和11）4月に台中一中に入った。田舎の公学校からは、よほど優秀でも競争の激しい台中一中にはなかなか入れなかつたのである。

南投と台中の間には、製糖会社が建設した軌道はあつたが、さとうきび運搬用の速度の遅い貨車が走っていただけであつた。当時はバスもなく、通学は不可能なので、李棟梁は学寮に入った。

台中一中には、とてもいい先生が揃っていた。ほとんどが広島高師、東京高師出身の先生であつた。京都帝大出身の先生もいた。

英語の清水襄先生のあだ名は「おじょうさん」、とてもいい先生だった。江崎先生は体操の先生で、生徒より五つか六つ上の若い先生だった。人格的に尊敬できる先生が何人もいたが、台北帝大出身の英語の小倉教諭は、なにかとい



うと殴るいやな先生だった<sup>7)</sup>。

毎年の行事として、日本精神を称えるための弁論大会があった。3年生の時、級長だったので選出された。公学校の先生は、「桜が散るような」と表現したり、「爆弾三勇士」を取り上げたりして、しばしば日本精神を説いたが、実際のところよくわからなかった。それで「日本精神」を「一中精神」に切り替えることにして、4年生5年生の批判を述べることにした。下書きを清水襄先生に見せると、「そんなことやめなさい。」「書き換えなさい。」と指導されて、言わせてもらえなかった。清水先生としては、「日本精神」を「一中精神」に変えたことよりも、上級生から睨まれてあとで困るだろうとの配慮だった。「おじょうさん」は、そういう優しい先生だった。

台中一中は台湾人有力者によって、台湾人子弟の教育を目的として創立された学校であった。

台湾人生徒がほとんどを占めたが、若干名の日本人生徒も入学させる措置がとられていた。李棟梁が入学する1,2年前には、日本人生徒と台湾人生徒が喧嘩して、刃物でけが人がでる事件があった。同じ頃、学寮生のストライキもあった。話によると、飯の中に鼠の糞が入っていたのが発端だった。その時の賄いはみな日本人だった。学寮生はその夜、家へ帰ってしまった。そのことがあって、賄いはみんな台湾人に替えられたということである<sup>8)</sup>。気骨のある台湾人生徒が学ぶ台中一中は、台湾総督府の文教担当者から見れば、思想的に悪い学校と見なされていたという。

そこで、嘉義高等女学校から広松良臣という日本精神の権化みたいな校長が赴任して、台中一中の生徒に日本精神を叩き込むことになったという噂だった。広松校長はある生徒の操行が丙になると、その生徒の教練・公民・国語・武道といった日本精神と関連した科目をみな丙にするという理不尽なやり方をした。4年生のとき、1級上の生徒が広松校長の教育方針のもとに退学になったことがあった。その生徒は日本内地の、ある中学校の5年に編入して卒業した<sup>9)</sup>。

広松良臣校長のあだ名は、「亀」といった。「亀」校長は1年生の第1週目の

修身の時間に、必ず訓話をし毎年同じ話を繰り返した。生徒は、「亀校長の三大訓辞」などと言っていた。この校長は落書きを特にきびしく追及し、見つけ出して退学にすると息巻いていた。それでも、武道館の壁や便所の落書きは止まなかった。「くそが落ちるとはニュートンも知らなかった。」というのは、中学生らしい傑作な落書きだった。

広松校長は、成績が悪くて台中二中に入れられないような日本人生徒を、台湾人の優秀な生徒を選びすぐった台中一中に、特別に入れていた。だから、落第するのは日本人ばかり。日本人生徒は虚勢を張って「チャンコロ」などという侮蔑語を吐いたが、彼らは勉強しないし成績も悪かったので、台湾人生徒からは馬鹿にされていた。そんなことで、両者の間でよく喧嘩が起きた。

全校生徒は700人ぐらいだった。下宿しているものもいたが、学寮の方が多くて、200人から250人いた。中学校を卒業して台湾島内で上級学校に進学するのは、非常にむずかしかった。比率が決められていて、台湾人は5パーセントしか入れないという差別があった。だから日本へ行って進学したものが多かった。

1941年4月に中央大学専門部法科に入学した李棟梁は、1943年8月に学徒動員のための検査を受けたことがあった。中学校の時、肋膜炎を患ったことがあり、検査当日は風邪を引いていたこともあって、学徒動員を免れた。食糧事情は入学当時はまだよかったが、卒業のころにはかなり悪化していた。腹が減ってしかたなかったというのが当時の思い出である。

1944年3月に卒業して、軍需工場の下請け会社に勤めた。タンクの部品を作っている工場で、事務系統の仕事をしていた。その年の秋に、鹿児島で乗船して台湾に帰った。台湾に帰ると、食べ物は豊富だった。帰ると母親が、木の芋のカピョウカを作ってくれた。砂糖を入れて煎ってくれた。世の中にこんなうまいものがあったかと思った<sup>10)</sup>。

李棟梁と同じ台中一中出身の楊喜松医師は、1921年（大正10）9月24日、台中州東清郡東清庄の生まれである。台中一中から、台北帝国大学医学専門部に入った。1943年（昭和18）9月に繰上げ卒業し、母校の耳鼻科教室に入り、台

北赤十字病院に勤めた。

父は楊元嵩，母は楊羅科妹。先祖は客家。祖父は，東清のタイヤル族の居住地で開拓して地主になった。父楊元嵩は，明治期に公学校を経て台北国語学校に学び，台中の警官訓練所に入って巡査になった。当時警察は，隘勇線を1週間に1度巡視しなければならなかった。楊元嵩がたまたま用があって他の巡査と巡視当番を代わってもらったその日に，巡視隊は全員「生蕃」に首を刈られて殺された。事件後巡査を辞めた父元嵩は，赤糖の製糖業に投資したが，会社が倒れたため負債をかかえ全財産をなくした。

楊喜松は二人兄弟で，兄作霖は優秀だった。公学校4年の時に試験を受けて小学校に転校し，台中二中に入った。兄は1935年（昭和10）に台北医学専門学校を卒業したのち，開業した。

楊喜松は7歳で東清公学校に入学し，兄と同様4年生の時に小学校への転校試験に合格したが，公学校の校長から転校しないようにストップをかけられた。結局，東清公学校を卒業して，台中一中に進学した。中学校，さらに上級学校へは，家が経済的に苦しくて行けないところを，医院を開業した兄が学資を出して支援してくれた。

楊喜松は台北帝国大学医学専門部卒業後，台北赤十字病院に勤めたので，戦地に行かなくてもよかった。赤十字病院は，病院全体が陸軍病院になっていて，すでに軍属になっていたから改めて徴用されることはなかった。台北帝大の大学病院の医者は徴用されなかったが，医学専門部附属病院からはかなり徴用された。軍属だけど，少尉待遇だった。楊喜松と同級生の中にも徴用されて戦死した医者がいた。台北帝大へ行った人の中には，軍医少尉で召集されて戦地に行った医者がいた<sup>11)</sup>。

### III

彭王蘭招医師は，1922年（大正11）10月25日に，新竹州新竹郡関西庄（現・関西鎮）に生まれた。公学校低学年までの子供時代を，新竹郡新埔庄の照門というところで送った。父の王阿元が照門公学校の校長をしていたのである。田

舎の小さな公学校だった。蘭招は幼い頃、夏になると父と二人でよく運動場の朝礼台に仰向けに寝て、降るような満天の星空を仰ぎながら、おとぎ話を聞かせてもらった。

阿元は我が子の教育でも、叩くようなことは決してなかった。何か悪いことをすると、「半時間立ちなさい」と言って黙た。母は何かと細細と叱る方だったが、父は「叱ってもしようがない。立たせとけ。」という教育だった。

蘭招には上に姉が一人いたが、田舎で破傷風にかかり幼くして亡くなった。歳が離れて弟たちがいた。戦前の行政区画の新竹州には、客家の人たちがたくさん住んでいた。楊梅・新埔・関西・苗栗の各庄には特に多かった。蘭招の父と母も客家の家系であった。

阿元の父、すなわち蘭招の祖父は、14歳の時に父親が「生蕃」に首を刈られ、幼い弟妹を抱えて苦勞した。結婚の時、男は支度金を女の家には渡さなければならない。その金がないから、蘭招の祖父は郭家の養子となり、男の子一人を郭家に入籍して養子の年限を積んだのち、王家に戻った。蘭招の父阿元は、祖父にとっては2番目の息子であったが、王家では長男であった。

阿元が生まれたのは1898年（明治31）、台湾が日本の統治下に入って3年後であった。蘭招の祖父は、地主から田んぼを借りて耕していた。5人の男の子と3人の女の子の大家族で小作人だったから、いつもぴいぴいの生活だった。貧しい中で祖父は長男の阿元を公学校にやったものの、学校を出るのを待ちかねて、借りている小作地を耕させるつもりだった。勉強のできた阿元は師範学校に行きたかったが、祖父は最初から許可するつもりはなかった。

ところが、公学校の担任の先生と校長先生が、何度も家に足を運んで、息子を師範学校へ行かせてはどうかと勧めた。費用は一切かからないし、師範を出れば小作の生活とは違って、暮らしが良くなると言って、日本人の校長と担任が阿元の父を説得した。

王阿元は、台北の師範学校に入った。学費はもちろんのこと、衣食住の費用もいらなかった。「1か月1円50銭の小遣い銭までいただいた。」と、のちに阿元は娘に語った。師範学校を卒業して、龍潭公学校（新竹州大溪郡龍潭庄）に

赴任した。初任給は、たしか16円という話だった。蘭招は、昔話として父阿元からも、祖母からもよく聞かされたという。

蘭招が照門公学校に通っていた頃、特に女の子は10人、20人と公学校に入っても、農繁期になると来なくなった。稲刈り、茶摘み、子守りなどで、学校を休む。休むと勉強が遅れて、そのまま来なくなってしまう。先生が連れ出しに行っても、農繁期になるとまた来なくなる。7、8歳の女の子が子守りをする。自分の家で茶を植えなくても、わずかなお金を得るために茶摘み女として雇われて行く。当時女の子の教育は、結局中途半端なものにならないとえないうところがあった。

1931年（昭和6）から32年にかけて1年余り、家族みんなで大陸へ行ったことがあった。父阿元の姉の息子が上海にいて、大陸は景気がとてもよいというので、父が商売をするつもりだった。上海のすぐ近くで、台北でいうと隣接する板橋のようなところに、家を借りて住んだ。ところが、1932年1月に上海事変が起きて、父の姉の息子の案内で揚子江の上流の鎮江に逃げた。そこに何か月かいた。その時、田舎のキリスト教関係の学校に入って勉強した。戦争で逃げないといけないし、大陸は治安が悪いし、人情はあまりなかった。

船で揚子江を下って上海に戻り、日本の大使館へ行って台湾に帰る手続きをした。上海で船を待っている間、祖母は子供がさらわれると困ると言ってとても心配した。それほど、当時上海には人さらいが多かった。

台湾に帰って、新竹州中壠郡楊梅庄の楊梅公学校の4年生に再入学して、2学期から通った。算術はなんとかついていけたが、国語は2学期の間ついていけなかった。担任は佐藤先生だった<sup>12)</sup>。父の阿元は公学校の先生方とよく連絡があって、佐藤先生に「うちの子は日本語を聞いてもわからないよ。」というのと、「どおりで、お話を聞かせても君の娘はポカンとしておったよ。」というようなことがあった。3学期になって、やっとなついていって、5年6年の2年間は順調に学力を伸ばした。蘭招は、大陸での1年余りの間に上海の言葉で普通の会話ができるようになっていたが、台湾に帰って半年も経つと全部忘れてしまった。

阿元が公学校に戻ったのは、日中戦争が始まって1、2年経ってからだった。日本人の先生が召集されて、教員が足りなくなったのである。

1935年（昭和10）に、蘭招は楊梅公学校を卒業して、新竹高等女学校に入学した。女学校へは、楊梅から汽車で通った。片道40分余り。大人片道46銭だった。学生は往復10銭で、1か月の定期券3円、3か月なら8円だった。蘭招は、教育に対して日本統治時代は実に安くしていたとの印象をもっている。

新竹高女では校長先生が、週に1度は生徒に教科を教えた。理科が専門の先生だった。校長先生の話では、女学校の学費は1学期8円、年24円。学費だけでは、とても学校の費用は賄えない。教員は20人、全部日本人。先生の月給と、いろんな経費を合わせて、生徒1人につき政府が1年に2,000円保障しているとのことであった。

日本人に対して、いろいろ悪く言う人がいるけれども、もちろん差別待遇はあるものの、公平的に言えば、日本語もわからないし、礼儀作法もないから、叱られたり、規則を守らなければ、怒られたり叩かれたりすることがあった。日本人は殴るのは普通だったから、殴られた人はまあ何やかやと言うけれど、規則を守っていれば殴られることもない。台湾ではそうとうひどく殴るのであって、中学生でも上級生は下級生を殴っていた。

入学の定員枠は、制度として日本人何人、台湾人は何人と定められていた。蘭招たちが新竹高女に入ったときは、1学年2学級100人のうち台湾人生徒の定員枠は30人だった。受験者は日本人と台湾人は半々だったろうから、台湾人に対して狭き門となっていた。

台北では第一高女がほとんど日本人だったが、第一高女でも10人前後ぐらいは台湾人生徒がいた。第三高女は台湾人生徒がほとんどだったが、日本人生徒も何人か入っていた。東京女子医専に入った人の中にも、第一高女出身の台湾人学生が何人かいた。台北第一高女は、医者とか官吏とか、資産家の娘などが多かった。第二高女も日本人生徒が多かった。

新竹高女時代に、台湾の人を見くびる先生が何人かはいた。20人の教員のうち2、3人。まあ、ちょっと見くびる先生がある。話し方でわかる。馬鹿にし

たような言い方をする。公学校の先生は、半分が日本人で半分が台湾人だった。公学校で日本の先生の教育は受けているけれど、田舎出身の台湾人生徒は、ふだん台湾語を使っているのだから、どうしても日本語は少しくせがある。台湾ぐせがある。そうすると、それを馬鹿にする。日本人生徒でも、1年の時は台湾人生徒を馬鹿にする。田舎から出てきた台湾人を何やかやと言って、ちょっとしたことで笑ったりして大騒ぎした。

だが1年越すと、もちろん台湾人は馬鹿じゃないから、女学校の生活に慣れてきて、たとえば数学などは、日本人生徒が台湾人生徒の教えを受けるぐらいな程度になってくる。台湾人生徒に数学の成績の悪い人はいなかった。

優等生は、私たちのクラスで字も奇麗だし成績もいい台湾人生徒がいたけれど、卒業式の代表には日本人生徒を出して、台湾人は出さなかった。そういう差はある。言うなれば、その程度の差別はあった。

台中第一高女を出ている蘭招の友達の話によると、高女時代の作法の女の先生が「台湾人は座れない。日本人は座れる。」と面と向かって言ったことがあった。台湾人は畳の生活でないからすぐに足がしびれてしまうが、その友達のがまんして座り続けて、とうとう日本人生徒が負けたということである。この作法の先生のように、少し見くびる人が新竹高女にもいた。国語の先生は、日本人生徒にも嫌われていた。特別お前は馬鹿だとは言わないけれど、言葉の雰囲気嫌がらせのようなことがあった。

だけど、そんなところが全然ないいい先生もいた。1年生のときの二反田先生は、とてもいい先生だった。男の先生。日本人も台湾人も平等にして、日本人が台湾人をいじめた場合、あの先生がいると、いじめた生徒は叱られた。植物の先生だった。たしか台湾山脈に行って、植物採集で、ツツガムシにかかって目がとっても悪い。未婚の先生で、厚い眼鏡をかけていた。

体操の江頭先生は、新入生の1年間、体操を始める前に一人ひとり3歩前へ出させて、自分で名前を言わせた。1か月か2か月すると、名前を全部覚えていて、全校生徒がどこで会っても名前を呼んで声をかけてくれた。その先生はきびしいけれど、みんなに慕われているいい先生だった<sup>13)</sup>。

当時、日本では丙午の女性は結婚しにくいという話を聞いた。新竹高女に丙午の女性の先生が何人かいた。たしか山本先生、八田先生、富田先生、鮫島先生が丙午だった。蘭招たちが卒業したあとに、富田先生、八田先生が結婚した。鮫島先生は裁縫の先生で、終戦後何年か経ってから、住所がわかって手紙を出したら、喜びを表わした細細とした返事に「新竹は第二の故郷だ」と記されていた。新竹生まれの先生で、戦後は鹿児島のお寺が住所になっていた。毎年手紙を書いていたが、九十を超してからは返事が来なくなった。亡くなったのかもしれない<sup>14)</sup>。

戦争が始まってからは、節約弁当だといって、梅干と漬物だけの弁当を持って行く日が設けられた。新竹神社への参拝もあった。

1938年（昭和13）に、初めて新竹への空襲があった。4年生の時のことで、ちょうど弁当の時間だった。ポンポンポンといった音がした。そのあと、校長先生と何人かの先生が見に行き、小さい爆弾の破片で木が削がれていたとの話だった<sup>15)</sup>。

新竹高女時代は、勉強の時間に追われた。日本の高等女学校は5年制だが、台湾は4年制だった。進学する生徒には、先生が放課後補習してくれた。1銭も月謝を払わなくても、補習してくれた。公学校でも女学校でもそうだった。新竹高女では、数学と英語と国語の先生が補習してくれた。蘭招は父の阿元から、「お前受けろ」と、東京女子医専を受験するよう勧められていた。女子医専は、数学・英語・国語の3科目だった。普通は3時ごろ終わって、4時か5時まで1時間か1時間半補習してもらって、修業年限の足りない分を補ってもらった。1銭も要求されることもなければ、まったくお礼をすることもなかった。先生の恩に対しては、卒業してから年賀状を出して感謝の気持ちを表わしているだけである。

教室は4時か4時半で戸締りするので、そのあと補習を受けている生徒は、図書館へ行って課題を勉強し、汽車の時間に間に合うように駅へ行って家に帰るという毎日だった。朝は6時半ごろ出て、汽車に乗っている時は、英語の単語を覚えた。



## 記憶の中の台湾と日本（2）（大谷）

1939年3月末、同級生の鄭秋桔といっしょに受験し、4月に東京女子医学専門学校に入学した。予科1年、本科4年、本当は5年だから1944年3月で卒業のはずが、戦争のため半年繰り上げで43年9月28日に卒業した。

東京女子医専の寄宿舍は、予科1年から本科5年まで各学年一人か二人の7人部屋で、上級生が室長を務めた。初めはちょっと慣れないけれど、慣れるとわりあい良かった。新宿でお寿司やお菓子を買って帰り、寝る前か勉強が終わった時にみんなで食べたりした。食べ物を買って帰ると、気付いた誰かがお茶を沸かし、お茶の会だとみんなに声をかけた。おしゃべりしたり、試験のない時はトランプしたり、楽しかった。食事は、食堂があつてみんないっしょだった。

朝鮮人学生は、台湾人ほど多くはなかった。大陸から来た学生、あの時は満州国といった。満州国からの学生は、国家試験のようなかたちで日本に留学していた。半年ぐらい前に日本に来させて、まず日本語学校で半年ぐらい語学教育が行われていた。

女子医専での講義では、本はあるけれど、主に先生の講義を筆記して勉強した。筆記が間に合わないところはとばしておいて、寄宿舍に帰ってから友達とノートを貸し借りして、お互いのとばしたところを埋めあつた。

実習は、いろは順に名前に分けてグループが作られ、解剖の実習も臨床の実習もそのグループごとに行った。だから、同じグループだった人たちとは、卒業後ずっと今日に至るまで連絡がある。みんな今も元気な様子だが、同じグループで実習した一人が、戦争中に広島で亡くなった。大竹という名前だった。

試験がない時は、よく映画を見に行つた。学生は封切りの映画は見ない。早稲田の方へ歩いたところに、全線座という映画館があつた。名映画として残つたいわゆる古い映画、「椿姫」なんかが上映された。封切り映画は50銭だったが、全線座の映画は20銭で見ることができた。座る場所がないので、みんな立ち見だった。全線座では、主に洋画が上映されていた。

土曜、日曜は映画を見て、次の日曜はどこへ行こうかと相談して、天気のいい時は郊外線に乗って江ノ島には何回も行つたし、桜の時は玉川の土手へ行っ

たりした。

女子医専では夏休み中の半月から1か月ほど、東京の貧困者居住地で施療を実施していた。その地へ赴いて、その場で患者を診て治療した。もちろん医者もついて行ったが、主に学生が診て施療をしていた。その地域の人々の便を集めて回虫検査をして、薬を与えたりもした。学生の実習にもなる恒例の施療活動であった<sup>16)</sup>。

本科3年生の1942年4月18日に、米軍機の空襲があった。ちょうど昼ご飯が済んで、花見をしようと屋上に上がっていると、飛行機が飛んでいるのが見えた。パンパンパンと聞いて、早稲田の方で爆弾を落とした<sup>17)</sup>。

卒業前になると食糧事情が次第に悪くなったが、玄米でも寄宿舎の大きい高圧釜で炊いているからまだよかったし、昼はたいがい鯨一人2匹でわりあい多かった。最後の何か月かは、米にカラス麦を混ぜたのを食べていた。食事が足らなければ、学生は学校の周りのうどん屋とか、井物を売っている店に行った。配給になる前から女子医専の生徒でもっているような店は、切符なしでも売ってもらえた。4時に夕食をとったあとお腹がすくから、うどんを食べて帰ったり、寿司を買って帰ったりした。

卒業後、母校の医局に残るつもりだったが、1942年3月の高千穂丸の沈没で、父阿元が「戦争が激しくならないうちに帰った方がよい」と言って心配した。もし平和だったら母校に残っていたかもしれない。

父方の祖母の親類が神戸に住んでいて、台湾から紅茶を仕入れていた。この親戚の家で台湾への帰りの船、富士丸の切符を買って待っていた。出発の2日前になって、その船は出ないから切符を戻すようにと連絡があった。2、3日前に、沈没したということだった。結局、鴨緑丸に乗って帰ってきた。あの時は満州航路の鴨緑丸が、台湾との間で使われていた。台湾に帰ったのは1943年11月で、神戸には1か月ほどいた。

門司で3日停泊して船団を組み、それを駆逐艦が護衛した。鴨緑丸にも、200人ぐらい兵隊が乗っていた。駆逐艦は、船団の間を回って護衛した。基隆のちょっと手前で船団と別れた。駆逐艦はそのまま船団についていった。乗っ

## 記憶の中の台湾と日本（2）（大谷）

ていた船の人が、台湾の飛行機が迎えにきますよと言って乗客を安心させていたが、結局何も来なかった。基隆に着いたのは夕方だった。11月の夕暮れは早い。基隆の港には、雨が降っていた。船員も乗客もおめでとうと言いつつ無事を喜びあった。

女子医専を出る時に、どこへ研修に行くか学校に申し込む。副校長は吉岡弥生先生の主人の弟吉岡正明先生、その先生が事務員を使って紹介状を書く。蘭招は台北帝大の桂内科を希望し、許可が出た。桂内科は台北帝大附属病院の第二内科、桂重鴻教授が担当だった。

新卒の医師一人か二人が、ベテランの先生に付いて教えてもらう制度があった。患者は受け持ったが、研修医は無給だった。助手には給与があるが、副手はなかった。有給助手何人と決まっていた、有給のポストが空かない限り何年いても無給だった。

蘭招は一時肋膜炎を患ったことがあった。桂内科は胸部内科が主で、彼女は伝染病棟の肺結核の患者を受け持っていて、肋膜炎になった。1年ぐらい休んで出勤すると、空襲が激しくなっていて、「お前危ないから来なくてよい。」と言われて、終戦まで1年近くか、半年ぐらいは出勤しなかった。病院は大溪へ疎開した。

蘭招は田舎の楊梅に疎開した。楊梅には爆撃はなかったが、機銃掃射があった。桃園の海岸、中壢の大園というところに飛行場があった。新竹は南寮に飛行場があった。飛行場の建設整備には、一般の農民も動員された。

徴用で行ったのは、父の末の弟の王源秀。日本が広東のバイアス湾を攻撃した時、通訳で行った。1年ぐらいて、虫垂炎になって帰ってきた。少なくとも中等学校を出ている民間人が、軍属として徴用された。叔父は軍属として広東に行った。

戦争が終わると、蘭招は病院に戻った。戦中と戦後を合わせて、実績としては4、5年大学病院に勤めた。大学病院にいた陳木村は、台北帝大出身で軍医として召集されて戦地へ行った。南方から帰って来た時に初めて会った。陳木村は、戦地では食糧がなくて蛆虫なんかを食べたという話をしていた。日本人医

師は戦争でだいぶとられたらしい。帝大病院の内科だけで4, 5人いたとのことだった。

終戦後、帝大病院には、海南島から復員した青年がたくさん入院していた。足に固い潰瘍ができていた。栄養不足で、傷があるとそのまま潰瘍になった。徴用された青年が帰ってきて入院していた。

王蘭招は1951年29歳で結婚し、彭王蘭招となった。1920年（大正9）生まれの夫は、台北帝大大学部医科を卒業して帝大附属病院の沢田外科にいた。結婚後開業し、妻は内科夫は外科を担当した。夫は68歳で亡くなったが、2人の息子は現在台北市内の病院で、長男は胸部内科、次男は心臓血管内科の医師として勤めている。

彭王蘭招医師は、父王阿元のことを思い出しながら、「日本領有として、日本の台湾統治を悪く言う人もあるけれども、私たち家族としては御恩を受けた方だと思います。公学校の先生のお蔭で父が師範教育を受け、そのことによって教育の大事なことを頭に入れることができ、収入はあまり多くはなかったけれども、教員の生活を切り詰めて子供を教育し、そのお蔭で医者になれた。それは結局、日本の教育の御蔭を受けたということです。」と語った。彭王蘭招医師の記憶は、遠い過去のこととは思えないほど鮮明であり豊かであった<sup>18)</sup>。

#### IV

林恩魁医師は、台南第二中学校を卒業し、浦和高等学校から東京帝国大学大学部医科に進んだ。1922年（大正11）2月1日生まれである。

父は林朝和、母は王雀。父は結婚後、インドネシアのバタビア（現在のジャカルタ）に行き、ワイシャツとか萱製品などを作って売っていた。朝和の兄が先にバタビアにいて、「こちらでの商売はとてもいいよ。」と言って、弟を呼んだのである。

母は台南病院の産婆学校に通っていた。産婆免許を取得したのち、母雀は6歳の恩魁をつれて、夫が待つインドネシアに渡った。バタビアで母は産婆の仕事をした。

## 記憶の中の台湾と日本（2）（大谷）

台湾からの渡航者は日本籍だから、日本人として扱われた。恩魁は日本領事館の小学校に入学した。全校生徒20人ほどで、1年から6年までのクラスがあった。恩魁の学年は4人、女の子2人、男の子2人だった。

4年生の時、父の友達につれられて台湾に帰り、台南の南門小学校に転校した。もちろん日本語はとても上手で、台湾に帰っても小学校に入ることができた。台南では、祖母の親戚にあたる公学校の教員をしていた黄金塗の家に預けられた。この時から恩魁は、父母兄弟と暮らすことはなかった。

1935年（昭和10）に南門小学校を卒業した恩魁は、台南二中に入った。中学校では2年間学寮生活を送ったが、3年生の時から下宿した。

16歳の時、母が亡くなった。その時母は35歳、恩魁の下に女の子が4人、男の子が3人いた。母が死んだ時、いちばん下の弟はまだ9か月だった。父は乳飲み子を除く6人の子供を友達に頼んで台湾に帰し、自分の兄の家に預けた。恩魁が中学5年に進級する頃だった。

恩魁は、中学卒業後はどうしても日本に行きたかった。台湾が嫌いだった。台湾は植民地であり、台湾では台湾人が差別待遇になる。日本人は台湾人よりも優遇される。何か事件を起こした場合、台湾人はいじめられる。そういうことを感じて台湾にはいたくなかった。

台南には一中と二中があって、生徒がしょっちゅう喧嘩した。その度に、台南二中の校長は、「あんたたち問題を起こさないように。台南一中の校長に謝らなければならないから。」と言う。台南二中は台湾人の学校だから、日本人の学校の台南一中に、理屈なしに謝らなければならないというのである。台湾は植民地だから、管理法がちがう。同じ罪を犯した場合でも、台湾人に対する警察の態度が違う。それがとても嫌で、台湾を離れて日本へ行くという決心をした。

台南二中の2年生の時に、恩魁は台南長老教会で洗礼を受けた。親と離れて一人暮らす彼にとって、クリスチャンになったことは、自らの勝手気ままを律して、良い人生を歩むための大きな支えとなった。

中学校5年の時、すぐ下の妹雅雅は花園小学校6年生で、女学校受験を控え

ていた。バタビアの領事館の小学校に通っていた妹には、受験のための補習が必要だった。恩魁は兄としての責任を感じ、伯父の家に通って妹の勉強を見た。1年間の補習の効果があって、妹の雅雅は台南第二高女に合格した。恩魁は安心して台湾を離れた。

日本では、本当に待遇が良かった。東京に住んでみると、日本人が台湾のことをあまり知らないことがわかった。高等学校へ入った時、「台湾ってどこ。」と尋ねられたことがあった。台湾に対する認識がないから、台湾に対する差別もわからない。むしろ、台湾からよく来たと言って、歓迎された。中学時代に思い描いたように、日本での生活はよかった。

浪一で浦和高校に入った。浪人1年のことを浪一といった。東京杉並区馬橋で下宿していた。旅順工科大学にも合格したが、浦和高校を選んだ。1941年(昭和16)4月の入学である。高等学校では学寮生活だった。いい帽子でもわざわざ穴を開けて、ズボンにタオルをぶら下げて下駄履きで歩いた。そういうことをするのがとても楽しかった。

高等学校に入ると、フットボール部とか、柔道部とか、剣道部、ホッケー部、水泳部などがあって、どこかに入らないといけない。恩魁は中学時代と同じ柔道部に入った。柔道で鍛えた精神、ファイト、負けじ魂を、その後の人生でも大切にしてきた。

台南二中に入学して学寮に入った時、夜の歓迎会の席で、学寮生の会「だるま会」の意義を先生が話してくれた。「社会へ出ると、だるまにならないといけない。転んでも起き上がる精神がないといけない。」と講演してくれた。柔道でさらにそれを学んだ。決して失望してはいけない。そういう精神があれば倒れないし、むしろ楽しいという信念を恩魁は培った。高校時代の柔道会は無心会といい、今も毎年東大の学生会館で開いている。

恩魁の得意技は、寝技。耳に、柔道部に入った時のお土産が残っている。充血したまま放置しておく、固くなるのである。柔道で鍛えた身体であることは、現在も一目でうかがえる。恩魁は当時の日本の教育に対し、尊敬の念を抱いているという。

高等学校は3年だけれど、2年半で卒業して43年9月に東京帝大医学部医科に入った。一時、台湾からお金が送られなくなって困ったことがあった。20歳になると、煙草の配給がもらえる。光5箱、1箱12銭だから5箱で60銭だった。闇で売ると12銭が12円になった。

幹部候補生になると、50円もらえた。幹部候補生は、卒業すると軍医にならないといけない。恩魁は幹部候補生になった。東大の医学部の学生は優遇されていて、軍需工場へ行く必要がない。将来の日本の医学を担うから、そういう所へ行くと危ないからということだった。

ただ、東大在学時代には、今も忘れられない嫌な出来事が一つあった。一高から東大医学部に入った劉沼光と二人で、東京の街中を歩いている時のことだった。派出所の前を通った時、「学生さん、ちょっと。」と呼ばれた。「学生証を見せてください。」と言うので差し出すと、最初の言葉が「おっ、なんだ、台湾人か。」だった。「ここは大稲埕じゃないんだよ。」「よし中へ入れ。」と言われて二人で派出所の中に入ると、警察官4、5人がいきなり殴りかかってきた。恩魁は手と腕で頭と顔をかばったので歯を折られなかったが、劉沼光は歯をやられた。大稲埕は今ほとんど廃れているけれど、昔は台北でいちばん賑やかな町だった。あの警察官は大稲埕を知っていたから、台湾で警察やっていたに違いないと、恩魁は確信している。戦争のためにみんなが一生懸命にやっているのに、学生がぶらぶらと街中を歩いているのが気に食わなかったのだろう。呼び止めてみると、以前から偏見をいだいていた台湾人だったので、暴行に及んだものと林恩魁は推測しているのである。

東京帝大医学部医科には、林恩魁と同学年の台湾人が劉沼光のほかに二人いた。一人は二高から、一人は山口高校から進学していた。当時、学生の地位は高かった。警察が理由なく学生に暴力をふるったことを大学に報告することもできたが、報告はしなかった。嫌な気持ちだけがいつまでも残った。

東京で2回空襲に遭った。1回目は45年3月の大空襲で、その時は本郷にいた。2回目は5月25日で、新大久保にいた。下宿先の家族は軽井沢に疎開していた。50歳ぐらいの下宿の主人と二人で逃げた。他の人のあとについて走り、

建物疎開で広がっていた東中野の駅前で一夜を明かした。翌日戻ると、家はみんな焼かれていて、鉄筋コンクリートの門だけが残っていた。飲む水もない、もちろん食べ物もなかった。東中野から上野駅まで歩き、軽井沢に行くことにした。道端に死体が転がっていた。焼かれると男女の区別がつかないが、母親らしい遺体と子供の遺体が同じ方向に伏していた。

この空襲のあと、6月に満州に行った。米軍が上陸して来ることはわかっていたので、無理をして満州に行くことにした。新京（長春）に台南二中でクラスメートだった翁通楹がいたので、彼を訪ねることにした。翁通楹は台北高校から京都帝大工学部へ進み、すでに京大を卒業していた。林恩魁は、1週間ほど新京の衛生研究所の研究員になって給金をもらったりした。

終戦後、翁通楹と二人で牛肉を煮て乾かし、それをほぐして売ったりしていた。満州では日本人が憎まれていたので、日本人とは離れて行動した。台湾へは、1945年12月に帰った。アメリカの船で青島から上海へ、上海から高雄へ帰って来た。

帰った時には、父親がインドネシアから戻っていて、台南の田舎の方に住んでいた。恩魁は、翌年台湾大学に編入したが1年遅れたため、48年に台湾大学医学院を卒業し、同年10月に妹雅雅の高女時代の上級生高雪貞と結婚した。雪貞の父は岡山で開業する内科医で、母方の叔父は高雄病院の副院長だった。恩魁は1年半ほど高雄病院に外科医として勤めたあと、旗山病院に移った。

旗山病院の外科医だった1950年10月に、「特務」に襲われて拷問をうけ、7年間火焼島に送られた。二・二八事件後の、いわゆる「白色テロ」の犠牲となったのである。病院からいきなり連れ去られた時のことなど、まことに重い事実を淡々と語ったあと、林恩魁医師は話を再び学生時代に戻し、次のように付け加えた。

東京で警察に殴られたことで、日本への印象を悪くしたけれど、私は小学校から中学校、さらに高等学校から大学まで、全部日本教育なんです。日本は私にとって育ての親。産みの親は台湾。台湾の人たちは、みんな日本が育ててくれたと思っている。育ての親ゆえに感情が厚いんですよ。それ



なのに、日本は台湾を相手にしない。日本には日本の立場があり、中国という国が後ろに構えているからかもしれないけれど、あまりにも情けない。林恩魁医師は、7年間の火烧島での苛酷な投獄の日々から解放されたのち、高雄市蔡外科副院長を務め、1961年に岡山鎮において林外科医院を開業した。1996年には台湾語訳の聖書『台語漢字聖經』を刊行し、2006年8月に自叙伝『我按呢行過變動的時代』（一橋書店）を出版している<sup>19)</sup>。

## V

沈鄭秋桔医師は、1922年（大正11）1月18日に新竹市北門町に生まれた。新竹の鄭家といえば、名の通った家柄であり、秋桔の子供の頃には大地主の祖父が一家の采配を振るっていた。父は鄭邦基、母は林氏金。鄭家の男性の名前には邦の字を入れる慣わしになっていたため、父は邦の字を略して鄭基と呼ばれていた。

鄭邦基は大東信託に勤めて竹南の支店長だったこともあるが、秋桔が公学校に上がる頃には、北門町の実家に帰っていた。小作料で生活する鄭家の家族は、他から収入を得る必要はなかったのである。次男だった邦基の家族は、長男の家族、三男の家族と同じ屋敷地に住んでいた。

鄭邦基は地域の台湾人の間に人望があり、日本人では金融方面や警察方面に顔が広がった。何か事があると、町の人たちが邦基を頼って相談に来た。当時は町の道路側に洗物を干してはいけないことになっていたし、家禽を放してはいけないことになっていた。

警察が回ると時折り干し物が見つかり、放し飼いの家禽が見つかる。見つければ罰金を取られるので、取らないように言ってほしいと頼みに来た。その度に、邦基は派出所に行って、重い違反じゃないからと理解を求めたという。

1月生まれの秋桔は、1年遅れて7歳で新竹女子公学校に入った。公学校時代で忘れられないのは、5、6年生の担任だった片山先生のことである。優しい女の先生だった。片山先生は、子供たちをととても可愛がった。「誰誰これをしてね。」と頼まれるだけで、誰もが先生に可愛がられていると感じた。秋桔

は運動場に植えてある花を取ってきて花瓶に挿すように頼まれたので、花瓶に水を入れて挿した。すると先生は、「見てごらん秋桔さんはとても気が利いている。水を入れて挿してくれた。」と褒めた。花瓶に水を入れるのはあたりまえだが、ちょっとしたことでも子供を褒めた先生のことは、今思い出しても気持ちがいい。

片山先生の家は、新竹の西門にあった。日本式の住居で、両親といっしょに住んでいた。熱心だった片山先生は、高等女学校を受験する子供たちを自宅に呼んで教えた。もちろんお礼を受け取るなどしなかった。学校が終わって晩ご飯が済んだあと、受験を控えた5、6人が先生の家へ行って教えてもらった。片山先生の母親は、教育熱心な娘を大事にしている、勉強に来た子供たちにはいつもお茶とお菓子を出した。

秋桔には時折り遊びたい気持ちが頭をもたげて、1、2度エスケープして先生の家での勉強に行かなかったことがあった。すると先生は、秋桔を泣いて叱った。秋桔はそんな先生に感動して、その後はまじめに勉強した。

受験の日には生徒が緊張するより、先生の方が緊張していた。試験場を出るなり、「どうだった。どうだった。」と、受験した子供に尋ねた。秋桔は円周を求める算術の問題で、単位をメートルで答えるべきところをセンチで書いてしまった。それを知った片山先生は、自分のことのように心配した。合格発表の時、秋桔の名前が出ていて、先生は本当に喜んでくれた。

秋桔は公学校で、クラスの1、2番を争うような位置にはいなかった。彼女は、経済的に恵まれず進学できなかった優秀なクラスメートのことを、今でも惜しいなと思うことがある。家の仕事を手伝い、学校を出て女工になった級友のことを思い出すのである。

卒業式には、市長賞・校長賞・優良賞・佳良賞などの表彰があった。秋桔は佳良賞をもらうことになり、その代表に選ばれた。片山先生の推薦で予行の時は代表だったのに、卒業式当日には代表が他の児童に替えられていた。彼女は子供心にショックを受けた。林朝娥という男の先生が、自分の推薦する児童に強引に替えてしまったとのことだった。担任の片山先生は、そのことで争おう

とはしなかった。あまり人と争わない、これは日本人の長所でもあるが、欠点でもあると秋桔は思っている。

一人っ子だった片山先生は、終戦後日本に帰ってからも結婚しなかったようである。その後ずっと片山先生と文通していた女学校の同窓生がいて、何年か前に亡くなったと聞いた。当時、二十幾つもの、まじめないい先生だった<sup>20)</sup>。

1935年（昭和10）に、鄭秋桔は新竹高等女学校に入学した。学年ごとに2クラスずつあって、進学する組は数学や英語に重きをおき、受験しない組は裁縫や料理などの教科に比重がかけられていた。秋桔は裁縫や料理はあまり得意ではなかった。作法の授業だけは、受験する組にも受験しない組にも必ずあった。国民とか民族とかが違って、守らなければならないことが必ずある。礼儀を知ることはとても大切であると、今も沈鄭秋桔医師は思っている。日本は何かかんとか言われても、あの時の日本教育は良い悪いがはっきりしていて良かった。作法の津田先生には、きびしいというよりも優しさを感じた。音楽の八田先生は女の先生、英語の渡辺先生は男の先生、そして江頭先生、皆いい先生だった<sup>21)</sup>。

だが、女学校では、日本人に対する認識が変わるような出来事があった。公学校の時は、台湾人とか、日本人とか考えることもなかった。公学校はみんな台湾人の子であり、日本人の子は小学校だった。

女学校3年生の時、秋桔は虫垂炎にかかり新竹病院で手術を受けた。執刀したのは日本人医師で、1か月ほど入院した。退院後足に力が入らず、術後も十分ではなかったけれど、薬を携帯して日本への修学旅行に参加した。秋桔としては、修学旅行の機会を逃したくはなかったのである。3年生から4年生に上がる1938年（昭和13）春のことだった。

旅行から帰ったあとも、彼女の体調は良くなかった。日中戦争が始まってから、新竹高女では、武運長久祈願で町外れの新竹神社への参拝が行われていた。秋桔が参拝に行かなかったことを、国語担当の安田教諭が知っていた。彼はそれを咎めて、「支那人だ、チャンコロだ、支那へ帰れ。」と罵った。その時秋桔は、「私は支那人ではありません。」と泣いて言ったという。公学校から日本教

育を叩き込まれた彼女の頭には、「支那」も何もなかった。漢民族だけれど、私は日本人だと、秋桔はそのつもりだったのである。病後で体調不良であることを知っていれば、あんな叱り方をしなくてもよかったものをと、いまだにあの時の嫌な気持ちを思い出す。その安田先生も、もう亡くなっただろう<sup>22)</sup>。台湾人生徒は、成績がいくら良くても級長には任命されなかった。新竹高女では、秋桔たちの卒業まぎわに、同級生の楊詠雪が初めて級長を命じられた<sup>23)</sup>。

1939年3月末、鄭秋桔は同級生の王蘭招と二人で、東京女子医専受験のため東京に向かった。

父邦基は台中一中を卒業していて、娘の教育には理解があったが、秋桔が東京への進学を希望した時にはためらった。東京女子医専への進学は、台北医学校を卒業した伯父の鄭邦榮の口添えで父邦基も納得した。伯父邦榮の娘二人は東京女子医専に進学していて、一人はすでに母校の医局に入り、一人は本科4年に在学していた。娘を東京にやるのを渋っていたものの、父邦基は合格がよほどうれしかったらしく、入学式に一人で東京に来てくれた。その時に父は風邪を引いて、それから喘息になってしまった。鄭秋桔医師は、「私は親不孝な子ですよ。」と、愛情深かった父のことを回想した。

東京女子医専では、勉強、勉強の日々を過ごした。内科の今村先生の講義が印象深かった。休みには、同部屋の人と映画を見に行ったりした。新宿に近い武蔵館では、封切り映画は見られなかった。再上映のアメリカ映画とフランス映画が多く、イタリア映画もあった。

東京女子医専在学中の1943年（昭和18）3月31日、21歳の時に1歳上の沈岫煌と結婚した。友人の紹介だった。沈岫煌は前年に日本大学専門部拓殖経済科を卒業し、中央大学法科研究部で憲法を学んでいた。日大専門部を卒業して中央大に学んだのは、軍隊に特別志願させられるのを避けるためだった。

沈岫煌は1921年（大正10）2月8日に新営の地主の家に生まれた。父は沈和尚、母は林喟といった。新営公学校高等科卒業後台南の南英中学校に入ったが、3年制の中学だったので3年生の1学期を終えたあと東京阿佐ヶ谷の帝京中学校に転校した。兄の沈岫隣が台中二中を卒業して東京医専に進み、すでに結婚

して渋谷に住んでいた。兄嫁は昭和女子薬専の学生だった。岫煌は兄夫婦の家から中学校に通った。

結婚後、秋桔と岫煌の二人は中野高円寺のアパート平和荘でしばらく新婚生活を営んだが、まもなく岫煌は東京に支店があった「中支那新興株式会社」の代理課長の職に応募して大陸に渡った。同社は、安徽省の淮南炭鉱を経営する日支合弁会社だった。岫煌は関釜連絡船で釜山へ、汽車で安東を越して北京へ、そして上海にあった本社を経て安徽省に赴任した。

秋桔は東京女子医専の寄宿舎に戻って、1944年9月に卒業した。9月末に、彼女は下関から釜山へ、朝鮮半島を汽車で北京まで行った。大陸に行くにあたって、秋桔は何度か特高の調べを受けて、ようやく渡航許可をもらうことができた。

北京の同仁会病院には、秋桔のいとこの嫁ぎ先の妹が勤めていた。同じ東京女子医専の卒業生だった。その縁でちょうど欠員のあった耳鼻咽喉科に勤めることができた。同仁会病院は日本の病院で、耳鼻咽喉科の主任は吉田といった。

秋桔を迎えるために北京に戻った岫煌は、会社を辞めて「新民会」という情報機関で翻訳の仕事をした。中国語を日本語に、日本語を中国語に翻訳した。いろいろな種類の文章を翻訳したが、忘れられないのは「中国の運命」という中国語文である。

終戦後、第十一戦区司令長官が「新民会」を接收し、岫煌は工作人、経済組に入れられた。秋桔は終戦前に、同仁会病院から開発病院に職場が替わっていた。終戦後、開発病院は中国軍に接收され、北京市立第二病院と名称が変わった。終戦の翌年、岫煌と秋桔は、青島から救済総署の船に乗って基隆に帰った。

教員として、医者として、それぞれ長く台湾社会で活躍してきた夫妻は、今は台北板橋で静かな生活を送っている<sup>24)</sup>。

## 注

- 1) 『女医界』1936年5月1日付第278号の「昭和十一年入学者氏名」には、「台中彰化高女廖氏里」と記されている。『女医界』は、東京女子医科大学史料室で閲覧した。

- 2) 東京女子医専の寄宿舎は、毎月25円かかったと廖里医師は語っている。
- 3) 廖里についての記述は、2006年12月23日の廖里の話によるものである。
- 4) 黄王一媛医師は、1930年（昭和5）10月に起こった霧社事件について、「初め警察がいつもいじめてね、蕃社の人もう耐えられなくなって、運動会で内地人をみんな殺した。あと軍隊が出て、全員蕃社の人を殺した。」と回想している。
- 5) 『女医界』1938年5月1日付第302号の「昭和十三年卒業生氏名」には、「淀橋区東大久保1丁目、私立大久保病院産婦人科 陳氏却」「東京女子医専病院産婦人科 王氏一媛」と記されている。
- 6) 王一媛についての記述は、2006年12月24日の黄王一媛の話によるものである。
- 7) 『台湾総督府及所属官署職員録』（1937年7月1日現在）には、州立台中第一中学校の教諭に「清水襄 愛媛」「陸軍歩兵少尉 正八 江崎哲二郎 福岡」「小倉<sup>タカシ</sup> 北海道」の名がみえる。
- 8) 楊基銓の自叙伝『台湾に生を享けて』（1999年、日本評論社）には、台中二中の2年生の時、「吉川祐戒氏が新校長となった」「慈悲深い人であったが」「台湾人学生と日本人学生の間には喧嘩、刃傷事件が発生し」「その職から離れなければならなかった」と記されている。
- 9) 『台湾総督府及所属官署職員録』（1934年8月1日現在）には、州立台中第一中学校学校長として「従五勲五 広松良臣 熊本」と記されている。
- 10) 李棟梁についての記述は、2006年12月25日の李棟梁の話によるものである。李棟梁は、戦後南投県政府の国税局に勤めた。
- 11) 楊喜松についての記述は、2006年12月28日の楊喜松の話によるものである。
- 12) 前掲『台湾総督府及所属官署職員録』（1934年8月1日現在）には、楊梅公学校の訓導に「佐藤徹三 東京」の名がみえる。
- 13) 前掲『台湾総督府及所属官署職員録』（1934年8月1日現在）には、州立新竹高等女学校の教諭に「二反田益美 広島」の名がみえ、前掲『台湾総督府及所属官署職員録』（1937年7月1日現在）には「勲八 江頭乙治 佐賀」の名がみえる。
- 14) 前掲『台湾総督府及所属官署職員録』（1937年7月1日現在）には、州立新竹高等女学校の教諭に「八田知恵子 神奈川」「鮫島菊 広島」の名がみえ、囑託として「富田富美恵 広島」「山本豊子 香川」の名がみえる。
- 15) 台湾総督府編『台湾日誌』は、1938年2月24日のところに「台北、新竹州下に敵機来襲し盲爆弾を投下、少数の死傷者を出す」と記している。
- 16) 『東京女子医科大学八十年史』（1980年刊）には、「夏期無料診療所あれこれ」と題して、夏期休暇中に無料診療が実施されるようになった経緯が記されている。
- 17) この日、空母ホーネットを発進したノースアメリカンB25による空襲があった。いわゆるドゥリットル空襲である。空襲を目撃した王蘭招はその日をよく記憶している。
- 18) 彭王蘭招についての記述は、2006年12月28日の彭王蘭招の話によるものである。
- 19) 林恩魁についての記述は、2006年12月29日の林恩魁の話によるものである。

## 記憶の中の台湾と日本（2）（大谷）

- 20) 前掲『台湾総督府及所属官署職員録』（1937年7月1日現在）には、新竹女子公学校訓導に「片山とき 三重」の名がみえる。
- 21) 前掲『台湾総督府及所属官署職員録』（1937年7月1日現在）には、州立新竹高等女学校の教諭に「津田勝野 福井」「渡辺松二郎 新潟」の名がみえる。
- 22) 前掲『台湾総督府及所属官署職員録』（1937年7月1日現在）には、州立新竹高等女学校の教諭に「安田光夫 鳥取」の名がみえる。
- 23) 新竹高女同窓会『会員名簿』（2001年刊）には、「卒業名簿 第12回卒業生」として、日本人79人（うち物故者20人）、台湾人29人（うち物故者12人）の氏名が記されている。
- 24) 沈鄭秋桔と沈岫煌についての記述は、2007年3月17日の沈鄭秋桔と沈岫煌の話によるものである。

### 〔付記〕

台湾における2006年12月、2007年3月の調査で、お話を聞かせていただいた方がたは、廖里氏、黄王一媛氏、李棟梁氏、楊喜松氏、彭王蘭招氏、沈鄭秋桔氏、沈岫煌氏である。本文中では敬称を略した。東京女子医科大学史料室と社団法人至誠会には、調査実施のうへでお世話になった。記して謝意を表す。なお、本稿は科学研究費補助金基盤研究(C)「昭和前期日本の社会・文化史と台湾—台湾知識人精神史の記録化」の成果である。